

現代俳句千葉

113号

平成二十六年年度

定期総会・俳句大会開催される

平成二十六年三月十六日(日)千葉市文化センターにおいて、平成二十六年年度の総会・俳句大会が開催された。総会では会員参加者九〇名、委任状二二四名で定足数を満たした。議長には戸邊光一氏を選出。来賓に神奈川県吉田功会長、東京多摩地区永井潮幹事長、東京都区山中正己幹事長の三名の方々をお迎えした。

■総会

総会では次の議案について審議し、いずれも可決した。

- 【第一号議案】平成二十五年度事業報告(資料一)
 - 【第二号議案】平成二十五年度会計報告(資料二)
 - 【第三号議案】監査報告(資料三)
 - 【第四号議案】平成二十六年事業計画(案)(資料四)
 - 【第五号議案】平成二十六年予算(案)(資料五)
 - 【第六号議案】その他(資料六)
- 【資料一】平成二十五年度事業報告

一 行事

- (1)定期総会および俳句大会
 - ①平成二十五年総会 三月十七日(日)千葉市文化センター 出席者 九一名
 - ②同右 俳句大会 参加者 一〇一名
 - ③同右 懇親会 三井ガーデンホテル千葉 参加者 六五名
- (2)吟行会
 - ①春の吟行会 四月二十九日(祝)浦安市郷土博物館周辺 参加者 七二名
 - ②秋の吟行会 十月二十日(日)加曾利貝塚 参加者 五〇名
- (3)研究句会
 - ①津田沼研究句会 毎月第二火曜日 午後六時より 津田沼一丁目町会会館
 - ②青葉研究句会 毎月第四木曜日 午後一時三十分より 千葉市民会館

③柏研究句会

- 毎月第二土曜日 午後一時より 柏市「ハツクルベリー」
 - (4)ミニ吟行会 七月二十一日(日)木下、川めぐり 参加者 二三名
- ### 二 幹事会
- (1)定例幹事会
 - ①平成二十五年一月二十九日(火)船橋市勤労市民センター
 - ②五月二十一日(火)同右
 - ③八月二十七日(火)同右
 - ④十一月二十六日(火)ホテルプラザ菜の花
 - (2)臨時幹事会
 - 四月二日(火)船橋市勤労市民センター
 - 三 会報の発行
 - 一〇八号 (二月二十八日刊)
 - 一〇九号 (五月三十一日刊)
 - 一一〇号 (八月三十一日刊)
 - 一一一号 (十二月一日刊)

目次

定期総会	1~3
俳句大会	3~4
諸家近詠	5~7
私の感銘句	8~11
春の吟行会	12~13
津田沼研究句会報告	14
青葉研究句会報告	14~15
柏研究句会報告・図書紹介	15
ひろば	15
会員・会友の近況	16
掲示板	16

【資料二】平成25年度会計報告書（平成25年1月1日～同12月31日）

次年度繰越金（円）	収入の部（円）		支出の部（円）	
	費目	実績額	費目	実績額
収入合計 3,382,701	前年度繰越金	1,144,376	会議費	76,240
支出合計 2,106,557	諸事業収入	1,381,200	会報発行費	495,385
次年度繰越金 1,276,144	助成金収入	792,000	通信費	35,360
	会友費収入	54,500	行事費	1,063,330
	雑収入	10,625	印刷費	164,648
	合計	3,382,701	消耗品費	21,389
			交通費	93,530
			交際費	89,540
			会報合本準備費	57,750
			雑費	9,385
			予備費	0
			合計	2,106,557

財産目録（円）

千葉興業銀行 普通預金	1,136,803
(野田支店) 現金	139,341
合計	1,276,144

四 会員数等 平成二十五年十二月三十一日現在
 会員 四〇四名・会友 二九名 計 四三三名
 主な異動
 ① 新会員十九名 新会友三名 退会 四五名
 ② 物故者（会員） 佐藤茂三郎、菅谷泰夫、
 中嶋いつる、澤井益市郎、
 福島由起恵、西宮はるる

【資料五】平成26年度予算
（平成26年1月1日～同12月31日）

収入の部（円）			
費目	予算額	前年度予算額	備考
前年度繰越金	1,276,144	1,144,376	
諸事業収入	1,200,000	1,200,000	吟行会等
助成金収入	740,000	800,000	
会友費収入	50,000	60,000	
雑収入	10,000	10,000	
合計	3,276,144	3,214,376	

支出の部（円）

費目	予算額	前年度予算額	備考
会議費	140,000	90,000	
会報発行費	500,000	480,000	
通信費	40,000	50,000	吟行会等
行事費	1,200,000	1,200,000	
印刷費	150,000	200,000	
消耗品費	40,000	50,000	
交通費	110,000	80,000	
交際費	70,000	70,000	
会報合本準備費	60,000	60,000	
雑費	20,000	20,000	
予備費	946,144	914,376	
合計	3,276,144	3,214,376	

【資料三】監査報告
 平成二十五年度の会計および事業の執行状況について監査した結果、すべて証票書類と一致しており、正當に処理されていることを確認しました。
 平成二十六年一月二十八日
 監査役 吉野 精
 同 長浜 聰子
 【資料四】平成二十六年事業計画
 一 行事
 (1) 定期総会および俳句大会
 ① 平成二十六年総会 三月十六日（日） 千葉市文化センター
 ② 同右 俳句大会 同右
 ③ 同右 懇親会 三井ガーデンホテル千葉

(2) 吟行会
 ① 春の吟行会 四月二十九日（祝日） 柏の葉公園
 ② 秋の吟行会 十月 吟行地未定
 (3) 研究句会
 ① 津田沼研究句会 毎月第二火曜日 午後六時より
 津田沼一丁目町会会館 二句事前投句方式
 ② 青葉研究句会 毎月第四木曜日 午後一時三十分より 千葉市民会館 三句事前投句方式
 ③ 柏研究句会 毎月第二土曜日 午後一時より 柏市「ハックルベリー」五句当日投句方式

(4)各地の句会(三二吟行会等)の実施日時、吟行地未定

二 幹事会

(1)定例幹事会

① 一月二十八日(火) 船橋市勤労市民センター

② 五月二十日(火) 同右

③ 八月二十六日(火) 同右

④ 十一月二十五日(火) 未定

三 会報の発行

一一二号(二月刊)

一一三号(五月刊)

一一四号(八月刊)

一一五号(十二月刊)

【資料六】

その一 新幹事補充選任他

千葉県現代俳句協会平成二十六年年度役員

会長 大畑等／副会長 秋尾敏・渡辺澄

並木邑人・檜垣梧樓／幹事長 秋尾敏(兼)

／副幹事長 内田庵茂・並木邑人(兼)／

事務局長 高木一恵／事務局次長 高橋宗史

／会計幹事 野口京子／広報幹事 松澤龍一

／幹事 ※イザヘル真央・上野紫泉・大塚弘毅・

小高稔・※小野功・木之下みゆき・久野康子・

小林俊子・小林実・小張直子・清水伶・下村洋子・

白木暢子・高橋健文・林阿愚林・星野一恵・

細野一敏・森村文子・三須民恵・矢野忠男・

山崎幸子／監査役 吉野精・長浜聰子／顧問

伊藤希眸・大木雪浪・小出治重・塩野谷仁

高桑婦美子・武田和郎・益田清・三苦知夫・

実翔繁・山崎聰・山中葛子・横須賀洋子・

／参与 青木一夫・岡田淑子・興津恭子・

菊地京子・希田沙知子・斎藤すず子・直江裕子・

中村樟舟・藤田守啓・門谷杜人・吉田耕史・

渡辺礼子 (※は新幹事)

その二 創立三十五周年記念俳句大会

平成二十七年秋に開催

平成二十六年 度 俳句大会



会 場 風 景

総会を終え、午後からは俳句大会が行われた。参加者九十名。司会は高木一恵事務局長と高橋宗史事務局次長、披露は星野一恵幹事、清水伶幹事、長浜聰子幹事の三名。

大会終了後の懇親会には来賓三名を含め五十一名が参加。司会は並木邑人副会長。俳句大会の成績は左記のとおり。

【事前投句の部】

● 千葉県知事賞

形無きものにつまずく春の闇 高桑婦美子

● 千葉県現代俳句協会賞

十二月八日燃えないゴミを出す 吉岡 一三

● 千葉市長賞

美しい卵が二つ冬の家 高木 一恵

● 毎日新聞社賞

さくらは途方に暮れるためにある 普川 洋

【席題の部】 席題「遅日」「すかんぼ」

〈入賞者作品〉 (二句の合計点による。掲載句は二句のうち一句)

● 千葉県現代俳句協会賞

すかんぼや都会に難民ふえて 希田沙知子

● 千葉県教育長賞

すかんぼやあつげらかんと飢えており 下村 洋子

● 千葉日報社賞

すかんぼや苛められたら泣いてやろ 椿 良松

(これより上位入賞者の作品)

・あかちゃんにゆびにきられている遅日 石井紀美子

・遅き日の後悔微糖缶コーヒー 吉岡 一三

・はばたいて飛ばぬ鶏遅日光 高橋富久江

・遅き日の蟹の潰れた顔がいい 高野 礼子

・東北を真綿にくるむ遅日かな 白木 暢子

・すかんぼを噛み晩年を遠くする 戸邊 光一

・すかんぼを踏んで原発ゼロとせり 長井 寛

・夕永しハシビロコウは動かない 楠見 恵子

・胸底の小石こすれる遅日かな 坂間 恒子

・隣人を三人騙しすかんぼ食う 大畑 等

・遅日かな母の短いメール来る 小張 直子

・天心を絞る遅日の観覧車 長浜 聰子

・すかんぼや日本の海が病んでいる 松澤 龍一

・春日遅遅顔またぎたる妻といる 細野 一敏

・遅き日や君等の主語が行方不明 並木 邑人

すかんぼに青のにじめるピカソの眼
鬼籍より誰もかえらずすかんぼ野
遅き日や村一枚を刷り直す
気まぐれに行く先変えし遅日かな
セシウムの野にすかんぼを見失なう
恐るべき暇持て余す遅日かな
・人間に山河酸葉に光あり
こころざしはまだ掴めず遅日の歩
すかんぼすかんぼ集めて空をふるわせる
日の丸の風になびかぬ遅日かな
すかんぼを齧る昭和の空覗く
すかんぼを齧る昭和の水の音
へその他参加者作品

清水 怜
山中 葛子
永井 潮
佐々木幸子
門谷 杜人
金子 未完
細根 栞
野口 京子
久野 康子
高橋 健文
三須 民恵
袴田 菊子
高橋 宗史
小高 稔
森 孝子
吉野 精
上野 紫泉
吉田 耕史
栃木 きよ
檜垣 梧樓
小出 治重
山中 正巳
加藤 法子
横須賀洋子
吉田 功
伊藤 希眸
木之下みゆき
小林 俊子
星野 一恵

すかんぼやまだ風荒き千曲川
手をついて立ち上がるまで遅日なる
・すかんぼやもう幾何学の解けない日
すかんぼぶんぶん長男が帰らない
すかんぼを手折りに食みし通学路
端居して瞼の重き遅日かな
手を入れる大八車遅日かな
・フェルナンデス・オチョアにやりとせり遅日
離るるは想い膨らみ遅日かな
彼の世への旅立ち思ふ遅日かな
真鯉らの近寄ってくる遅日かな
すかんぼや若返へるなら十五歳
マンモスも鳥も人も遅日かな
すかんぼや戦火のがれし日々おも
・遅き日や一機消えたる空の闇
煩惱の尽きることなきすかんぼ
酸葉食む後半生を急がない
暮遅しぼつんと座る遊牧感
すかんぼやうからやからの声は耳朶
冷徹の女と男遅日なり
すかんぼや叱られしこともう忘れ
すかんぼや見本みながら反省文
すかんぼの宙はどこまでつづくのか
すかんぼのつながっている駄菓子屋さん
・沈むとき燃ゆる日輪暮遅し
・春日遅々人蘇るゲームして
すかんぼや卒寿の尼僧道を説く
すかんぼをかねでまだまた生る未知
すかんぼを噛んで立ち寄る吾子の墓
だんまりの男が帰り遅日かな

内田 庵茂
渡辺 澄
塩野谷 仁
秋尾 敏
大塚 弘毅
高橋 博
矢野 忠男
東 國人
小林 実
池田 幸
岡田 春人
立花 洸
森村 文子
山中 頼子
井上けい子
小野 功
黒澤 雅代
伊藤 典子
福田志津子
岩佐 久
佐藤 鈴子
イザヘル真央
岡田 淑子
川又けい子
椎名 鳳人
羽村美和子
佐藤 信顕
佐々木 禎
重田 忠雄
岩崎 令子

・我武者羅な子どもの尻尾すかんぼや
すかんぼや記憶の中の無人駅
酸模噛むヒトが野生に戻るとき
歌でしか知らないスカンポ懐しむ
面の皮一枚剥がす遅日かな
すかんぼを噛み健脚の父のこと
すかんぼはどこか人間臭きもの
すかんぼの涼風多忙な顔を吹き
酸模やもう思い出せぬ味なりし
とりあへず天下太平酸葉噛む
蛍光灯の紐揺れ遅日の番屋かな
すかんぼ赤し汚染ごみ埋立てて
追憶のすかんぼの丈また伸びる
小川トシ子
伊関 葉子
徳吉洋二郎
なかもと淑子
林 阿愚林
林 ゆみ
青木 一夫
竹内 絵視
棗 精伊
佐藤 晏行
武田 伸一
高木 一恵
平山 道子

(作品の上の・印は来賓、正副会長、顧問特選)



希田沙知子さん



議長 戸邊光一氏



下村洋子さん



吉岡一三さん



椿 良松さん



高木一恵さん

諸家近歌

中川 広子

茄子漬を丸かじりして子沢山
葉缶から直に飲む水雲の峰
草の花杖一本に身を托し
言葉じり舌に絡まり冬ざるる
冬至粥気持の他は皆古びて

前田 孝子

寒風や鼻尖らせて子等駆ける
形振りをかまわず溶けし雪だるま
草萌や顔上げて歩み出す
蒼天のこぼせし紅葉手に受ける
畑道をくの字にせばめ露葎

内藤 富雪

十二月煮魚の眼がど肝抜く
初春やこれも転生逆さ富士
冬夕焼顔黒富士の綺麗ごと
黒の中人は生きてく枇杷の花
天空に城あり少年ヴィオラ弾く

西澤 照雄

この道はここに出るのか花蘇枋
汗の引くまで山頂を一人占
真葛原どこにあるかと聞かれても
採血の列直角に憂国忌
つぎ／＼に貨車の連結雪催

野口 京子

春隣赤いランプが眼に残る
変わりたい山から笑う風の綾
鶯の余韻を畳む渡し守
沙汰止みの野焼奥まだ水つぼい
思春期の揺れてる不安柳絮飛ぶ

橋口 久子

未黒野や大手広げて深呼吸
振り向けばまだそこに母寒月光
鍋料理集いし友の声滾る
風に鳴る絵馬のいろいろ初詣
片言がCMまねる初笑い

徳吉洋二郎

今日遠く桜まみれの舫い船
秋刀魚食い人間らしくなりにけり
流れつつ澄みゆく水や山頭火
影を集めて晩秋のすべり台
人間の自由なかたち冬木立

津高里永子

騒音を越えて東風吹く夢の島
埋立地三寒四温めくベンチ
草籠第二福竜丸錆びて
死の灰は壘にありけり遠霞
被曝せし死の灰白し魚は氷に

西澤 繁子

鳥の来て鳥の影来て十二月
狐火や胃の腑にホットウイスキー
冬うらら鱈の髭を数えおり
寒明けしことを音色に鼓方
能面に納まらぬ顎冴え返る

中村 冬美

白いページ桜吹雪に空けておく
夕牡丹絵巻の中がさわがしい
花野にて最後の線描き入れる
線描のひぐらしの羽濡れている
うるのおくやま奥へ奥へと紅葉狩る

なかもと淑子

日曜日水の温むを独り言つ
大西日樹液まで染め未練あり
青とかげ振り向きさまの剽軽
ガチャガチャと夜つびて繰り言せん方なし
ようやくと捨てる決心昼の虫

近江喜代子

ピアス外す雛の吹き聴くように
詰襟に首を泳がせ入学す
男衆の白き臍祭り足袋
初夏の雲つまんで伸ばし太極拳
保育器の宇宙船めく星月夜

三須 民恵

花開花パツと閃めく絵の構図
露の臺覗く航空博物館
花開花臍繰りそつと出す余裕
鶯へ返す口笛指呼の間に
白花のタンポポ場所を取る資格

普川 洋

老いという桃いろのとき鳥帰る
牛の反芻日本語という臙ろ感
なぜかいつもほつとするさくらのはは
どこかで声がしている枯野の明るさ
今を超えている赤とんぼの赤さ

檜垣 梧樓

戦争の廊下無数の寒卵
邦人死す沙漠に麦青めるや
霧れりあめが下なる狸にも
青蠅に付きまとはれて蒸気河岸
秋澄むやムイシユキンらは行列す

諸家近詠

福逃げぬやうに抱えて福袋
隕石の燃え尽きてまた凍て戻る
どかしてもどけても瓦礫春遅し
缶蹴りの鬼の子釣瓶落しかな
小鳥来る街にも巨大量販店

藤井 稔雨

星野 一恵

向う気をつよさが東風をはね返す
鳥雲に波郷を辿る向島
もう芽吹きはじまっている川向う
コンビニでたむろしている余寒
春寒しいい人ばかりは疲れます

根岸 ナツ

白玉やさらり難病語りし友
冷し瓜なつかしきかな大家族
いたはられ老実感す夏帽子
新茶くみつくづく欲しき両隣
辛口の手紙を孫へ遠い雷

保坂ミエ子

冬鴉笑っていない眼が並ぶ
雪吊りの蒼穹を負う男振り
彼岸西風箱にころりと石ひとつ
まどさん逝く花天に伸びる象の鼻
しんがり暮色を曳いて鴨帰る

細野 一敏

桜東風憲法を説くしたり顔
木の股より生まれ言われし桜
ハイエナの見え隠れせし桜時
尼寺僧寺逢い引きならぬ花の雨
又ひとつ嘘をつかせる花の酔

女子力のはなし日光きすげ咲き
三伏のはざまハーレー・ダビッドソン
ピーマンに三原色を着せてみる
人逝きてばあんと石露の咲きにけり
薄氷を待たせてありぬ下校の子

藤井 遥

久保さちを

まだ昭和詠む漢いて三鬼の忌
流刑ありし昔を偲ぶ花吹雪
世の中は男とおんな櫻騒
故郷はロストワールド花吹雪
五月の陽頬に返してネックレス

笹沼 郁夫

老犬と寒九の水を飲みにけり
傘干してあり白椿咲いており
夏瘦せと見まがう背丈伸びし子よ
春雨傘あずけて山の共同湯
遠足や安房どこからも海見ゆる

福田志津子

一杓に光遍し甘茶仏
陣取つた尻突きあぐる大火花
新涼や古語辞典など開かせる
雲一つ置くを許さぬ冬の晴
産声にこの世厳しき寒の入

増田 豊子

長椅子は夫の手作り残り菊
脳の中見てるやうな冬夜空
カレンダー傾ぐ勤労感謝の日
秋暮れてから面白いデイズニーシー
穏やかな秋の節分兄が来る

花屑の風に流れて深き昼
闘鶏の大きレブリカ養花天
神様のため息に吹く花筏
花冷えのパンジョー弾きの瞳の深き
透明に散りたしさくら散ることく

福田 柁子

藤岡 尚子

ふらここや此の町を出て雲に乗る
カラフルなりユック一列若葉光
夏つばめお茶をどうぞと深庇
釈迦牟尼やつつがなき日の石路の花
また次のごつこ遊びや木の実降る

廣谷 幸子

木枯一号やくそくごとありて齟齬
寒気団居座り深川飯屋に灯
一月は化学反応して無音
おおかたは回想さくら紅葉かな
円でなく丸とも違う春の夜

羽瀨 順子

昼の月残して枝垂桜かな
花吹雪浴びて私は一人なり
故里に帰ることなし桜咲く
花吹雪人は喜び人は泣く
桜咲き社の庭の闊白し

馬場 馬子

狛犬の阿吽の構へ初明り
本土寺の鐘の音ちぢむ春の雪
雲の峰絵面に声の無言館
紅うすき人萩を詠む御成座敷
梅薫る双樹一茶の茶室かな

諸家近歌

林 紀之介

どこでくらししてもゑのころぐさのそば
下ること多くて山を登りけり
うしろへとうしろへと耕してゆく
暮れのこる空の枯木になりけり
裸木の辛抱といふかたちかな

細根 栞

寂光の花は風なり風は花
叙事詩あり春夕焼の丘があり
地の塩となれず蛙の目借時
ひとすじの青水無月を走る水
空という重き泰山木の花

原島 典子

言い負けて行きあたりばったり蝶の羽
春一番にとばすイヤリングの別れ
はらはらと噂話のたまる夜桜
春眠のぐわんと河馬の口の開く
マニキュアとか塗って春の闇攪拌

鈴木 陽子

地下鉄の地下も地下鉄春の闇
アオザイの衣擦れの首夜の秋
秩父路やあばれ川追ふ秋の雲
十二月八日消すこと出来るボールペン
初糶りや翻車魚箱をはみ出しぬ

増田 斗志

種を蒔く七つ道具に翁の手
さみしくて我慢にならず雲雀落つ
歳月がうしろに立てる雛流す
鳥帰る吾にも帰りたきころ
初蟬や柱がみんな黙りをり

藤田 富江

咲きみちて真白き辛夷にある不安
花は葉にすぎゆくものになりたがる
桃の花帰りもこの道通じゃんせ
ひとり欠けたる団欒の月おぼろ
梵鐘の黙禱となる夕櫻

股野 久子

水温む運動場の蛇口より
帰り来て夕べ花菜の甘きこと
明日よりはバスの来ぬ道大ぶぐり
青葉風髪を束ねて長談義
駅売りの水を求むる終戦日

羽村美和子

十六夜の影歩き出す宇治拾遺
沈黙考ときおり霧の花咲かせ
ゴスベルソング裏声に絡む虎落笛
だんまりは秘密保護法石路の花
しだれ桜心に危ういバランス

水沼 幸子

爛漫の桜映して沼曇り
三月の硯に満たすイオン水
忘却を促すように雛の笑み
初蝶の翔ぶを許して海はるか
蜻蛉に仔細ありけり火の匂い

平木智恵子

花の世の千里を望む老驥の目
入学や自分の鍵を持つ机
忽然と燕川面の影迅し
じゃんけんぼんぐうしか出さぬつくしんぼ
春耕や肥料の袋なないろに

日野 葉子

雛の箱かすれし文字の購入日
空色を使いきつたる五月晴
花木榿日日新たなる心意気
締めりなき暮らしに歯止め盆用意
式部の実大和の色を守りけり

増田 元子

二度すれ違う薄氷の郵便夫
潮風も嗅いでみたいな葱坊主
紋白蝶止まりたい木と避けたい木
神事脈々中空を舞って夏
たちまちに手をつなぐ雲花林檎

保坂 末子

灯を消してその夜は妣といふ臍
雲雀落つ風の匂いを消すように
地虫出づ見習期間は三ヶ月
行き先はどこでもいいの春帽子
靴先で男が野火の向き変える

松本 静頭

目刺焼く昭和の色に焦げるまで
海底の子等なぐさめよ流し雛
ナイターの負けて二人は貝になる
無月なり敗者に容赦なきカメラ
福島のいなご無念の貌持てり

松澤 龍一

ヤマグチオトヤ寒三日月を懐に
焼き鳥の空串日本革命論
オトコ四人殺め岩波『歎異抄』
藁苞の納豆昭和二十五年の息
空つばの運河五月の樹が騒ぐ

私の感銘句

小林 実 作者名 号頁

だれも居なくて満月と言えるのか 山崎 政江 108 2
 我が腸夜行列車の匂いせり 大畑 等 109 7
 蔵の扉を開けて少年花の冷え 岩崎 令子 109 7
 初雪や一人ぼっちは恥ずかしい 金子 未完 109 8
 黙祷は何も祈らず沈丁花 越野 雄治 109 11
 照星の中はいづこも桜かな 加藤昌一郎 110 2
 百年後とは冬霧にたどり着く 菊地 京子 110 3
 残照の海が鳴るなり石榴裂け 庄司とほる 111 4
 花ぐもり肉体とどめようもなく 田沼美智子 111 5
 初稽古市松模様の会話飛ぶ 神尾 浄水 111 7
 百年後とは冬霧にたどり着く 菊地 京子

もし輪廻転生があるならば、次は女性に生れて世の男どもの度胆を抜いてやろうと思うがそうはいかず。あい変らずどこかの底辺で蠢いてようやく冬の霧の目先の効かないあたりにたどり着いたのである。

勝手に想像して作者に申し分けありません。読者がいろいろドラマを作る句で感銘致しました。

原島 典子

巡礼のまひるの闇を黒揚羽 清水 伶 111 4
 血の薄き日なり金魚の浮く日なり 塩野谷 仁 111 4
 幸せの寡黙を通す青みかん 谷本 元子 111 4
 閻魔王の舌かと思ふ曼珠沙華 白鳥 可桜 111 5
 エジプトは永遠なのか汗の訃音 鈴木 郁子 111 5
 生きる面倒死ぬる億劫あみだくじ 高桑 弘夫 111 5
 花吹雪ここは最前列である 高桑婦美子 111 5
 瞑想に形があれば枯はちす 高橋由紀子 111 5
 東京の新陳代謝ゆりかもめ 木之下みゆき 111 6

いくつもの手が出て菩薩あたたかし 佐藤 映二 111 6
 血の薄き日なり金魚の浮く日なり 塩野谷 仁

人間は人生において何かを失う事に、だんだん慣らされる、その方が悲しみを少なくすることが出来るから。血の薄いと感ずる作者が金魚に自分自身を投影し、来るべき日に思いを致しているのかもしれない。

坂本千恵子

余生とはまだある未来福寿草 相原 一枝 108 2
 立春のひかりを掬ふティースプーン 岩見ちづる 108 3
 町中の空うごかして鯉のぼり 岡崎 翠 109 8
 桃・李どちらも咲いてかたづけかず 加藤 法子 109 8
 芝桜おんな同志という疲れ 佐々木幸子 110 3
 まだ乳房持たぬ少女や蓮膨らむ 斉藤すず子 110 3
 桃のかたちにフクシマの桃あらふ 川又 優 110 3
 引力の薄らぐあたりからす瓜 塩野谷 仁 111 4
 煮凝りにつながつている北家族 鈴木 郁子 111 5
 いつも何か忘れし不安水母浮く 高橋富久江 111 5
 桃のかたちにフクシマの桃あらふ 川又 優

原発事故の真つ只中にある福島の桃を慈しむように、「桃のかたちに・桃あらふ」という表現に作者の優しさと思ひやりに深く感銘しました。私の家にも毎年、福島の親戚から届く桃があります。そこには、震災のあと、必ず検査済証が貼られています。生産者の御苦労や福島の方々への事を想いながら美味しく頂いております。

金田めぐみ

SLが好きで総立ちつくしんぼ 國分 三徳 110 2
 多芸とは無芸に似たり晩夏光 佐藤 信頭 110 3
 饒舌な指があるだけ日向ぼこ 黒澤 雅代 110 3
 特上の天井八月十五日 佐久間眞城 110 4
 たましひを置き去りにして五体消ゆ 小出 治重 110 4

家それは匂いあるもの浅蜷汁 楠井 収 110 4
 采配は古老の手練れ荒神輿 千葉 智司 111 4
 帰省子と明日のパンを買いに行く 田部井知子 111 4
 梅干して闇をすっぽくしておりぬ 高橋富久江 111 5
 鶏頭が歩き出しそう村の昼 高橋 宗史 111 5

久野 康子

臘梅に触れて光となる畏れ 市川 唯子 109 7
 嘴を揃えてうぐいす餅が並ぶ 加藤 法子 109 8
 オラばかり生きて・漁夫墓洗う 加納ひでこ 109 8
 佳きものを見るたびホーホケキヨと思ふ 加藤昌一郎 110 2
 後鳥羽院眉間に蛩隠しおり 坂間 恒子 110 3
 豹紋蝶放つメンタルクリニック 坂間 恒子 110 3
 百年後とは冬霧にたどり着く 菊地 京子 110 3
 死をねむる母は白花さるすべり 清水 伶 111 4
 花吹雪ここは最前列である 高桑婦美子 111 5
 銀漢濃し夜汽車いつしか濡れており 小林 実 111 6

栗 栢伊

春隣文房具屋のためし書 石井 浩美 109 7
 嘴を揃えてうぐいす餅が並ぶ 加藤 法子 109 8
 悪い児はいないおしくらまんじゅう 金子 未完 109 8
 白息を絡ませ合つてのち別る 金子 敏 109 8
 踏青や人間だけが音を立て 加藤昌一郎 110 2
 うさぎにはなれない亀だ昼寝する 小野 裕文 110 2
 じゃがいもに芽が出てひどい肩こり 岡田 淑子 110 2
 特上の天井八月十五日 佐久間眞城 110 4
 オーバーのポケットにある未解決 近藤 幸子 110 4
 ほうきなどいらぬと魔女が春疾風 谷本 元子 111 4
 特上の天井八月十五日 佐久間眞城 111 4
 世代交替が進み戦争のことを知る人が急激に

減少。新聞が八月十五日紙面で改まった終戦記念の記事を載せなくなった。

俳句もかつては戦争の悲惨な有様と現在とを對比させ、平和の尊さを浮彫しようとするものが夥しく造られた。

標句は、我々はこんな国にするために死んだのではないと英霊のお叱りを受ける平和ボケ飽食日本の句か、或いはかつて戦中戦後の飢餓空腹期に夢見た馳走のことか、いずれにせよ警世の句に襟を正さねばならない。

田端 重彦

余生とはまだある未来福寿草 相原 一枝 108 2
 草矢射る少年一人谷津田道 宇佐見房司 108 2
 一病も絆となりて冬温くし 大川 園子 108 4
 万葉集読みあぐ速度春の川 石井紀美子 109 7
 焼野より抜け来し人の声太き 金子 敏 109 8
 荃立や安房の山なみ低姿勢 川井 吉二 110 2
 すててこや短気損気は親譲り 北村 妍二 110 4
 法師蟬ときおり韻を踏み外し 椎名 鳳人 111 4
 緑蔭に鶏と人間農学部 高橋 健文 111 4
 向日葵の背向き前向き反抗期 高橋由紀子 111 5
 向日葵の背向き前向き反抗期 高橋由紀子

向日葵は陽光に向きを合わせて咲いている。
 中七の前向きは解かるが、その前に背向きと詠み、下五で反抗期と断定。夏休みが終る頃には子供達も成長して、それを示唆しているような俳諧的な一句である。
 数年前に南フランスのアルル地方を旅した折、ゴッホが題材にしていた彼方此方に広がる向日葵畑に立った事を思い出す一句でもある。

小張 直子

振り向かぬ風を色無き風という 山崎 政江 108 2

冬瓜切る純白の日々は退屈 伊藤 希眸 108 3
 喪中で枯野の奥の枯野まで 青木 一夫 108 4
 貝が口開かず十二月八日なる 石崎多寿子 109 7
 我が腸夜行列車の匂いせり 大畑 等 109 7
 春野菜しゃべり出したら止まっない 岡田 淑子 110 2
 百年後とは冬霧にたどり着く 菊地 京子 110 3
 うまそうなつらそうな雨の藤房 久野 康子 110 3
 美しき嘘ありいわし雲朱色 千葉 智司 111 4
 鶏頭が歩き出しそう村の昼 高橋 宗史 111 5
 鶏頭が歩き出しそう村の昼 高橋 宗史

一読して発想の展開の面白さと素晴らしさを感じた。と言う事は鶏頭の花、特にあの真っ赤な鶏の鶏冠と見違える程の象ちに驚異の念を持つ。作者は鶏頭の花と鶏を一束にして作品化した。
 こう考えると中七の歩きだしそうと言うフレーズが実感として伝達される。しかも一農村の昼の風景と合間って鶏頭の花すなわち鶏が歩き出しそうと作品化した事に深い感動を覚える。と同事に感銘する事を禁じ得ない。この作品に出合えて嬉しく思う。

松澤 伸住

冬空はフェルメールの青喪が明ける 石崎多寿子 109 7
 正月のしつぽが残る露地に入る 石井紀美子 109 7
 ロボットの悲しき手足啄木忌 加倉井允子 110 2
 浅草の日暮は早し招き猫 片山 依子 110 2
 春野菜しゃべり出したら止まらぬ 岡田 淑子 110 2
 対岸をいつも気にしている晩夏 黒澤 雅代 110 3
 法師蟬ときおり韻を踏み外し 椎名 鳳人 111 4
 懸命に生命を燃やす秋の蝶 白鳥 可桜 111 5
 かなかなは時空の岩に爪立てる 清水三千代 111 5

虫干しの匂ひの中に母が居る 高橋由紀子 111 5

岡田 淑子

だれも居なくて満月と言えるのか 山崎 政江 108 2
 星飛んでわれ乙女座とはこそばゆし 相原 一枝 108 2
 無花果の肉を付けたる肖像画 大畑 等 109 7
 冬空はフェルメールの青喪が明ける 石崎多寿子 109 7
 カメレオンのどこから秋になるのかな 國分 三徳 110 2
 蛇現れて少年青白く去れり 倉岡 けい 110 3
 百年後とは冬霧にたどり着く 菊地 京子 110 3
 血の薄き日なり金魚の浮く日なり 塩野谷 仁 111 4
 花吹雪こは最前列である 高桑婦美子 111 5
 寒稽古卑弥呼と寝たことほると言う 武田 伸一 111 5

長浜 聰子

天皇の背中に老という花野 秋谷 菊野 108 2
 掌中に雪を降らせるかな晩年 明石春潮子 108 2
 湯豆腐や日高利尻の押問答 馬淵 津枝 108 3
 大僧正酔牡蠣の匂いしていたり 植原 安治 108 4
 冬空はフェルメールの青喪が明ける 石崎多寿子 109 7
 桃・李どちらも咲いてかたづけかず 加藤 法子 109 8
 介護者の指は水中花の湿り 加倉井允子 110 2
 後鳥羽院眉間に蛭隠しおり 坂間 恒子 110 3
 ラファエロの瞳のさみたれを見て帰る 清水 伶 111 4
 夕顔を数えておれば夜汽車くる 塩野谷 仁 111 4
 湯豆腐や日高利尻の押問答 馬淵 津枝

今夜は湯豆腐にしようかと、利尻昆布と日高昆布を鍋に入れた。しばらくすると小さな泡を立てはじめ「押問答」が始まった。「私の方が知名度も高いし濃厚なだしが出るわ。」「私の方こそ風味があるわ。」熱り立った会話ではなく出身地を誇りに思い、主張している軽い「押問

答」であろう事は季語が語っている。十七文字の中に、土地柄や人間模様まで想像させるのは「地名」をうまく生かしたからか。そう言えば作者は北海道出身。

金子 未完

蒲の穂のつんつん空へ少年期 山口 智子 108 2
 天皇の背中に老という花野 秋谷 菊野 108 2
 余生とはまだある未来福寿草 相原 一枝 108 2
 通り魔を十重二十重せよ春の月 横須賀洋子 108 2
 草茂るふるさとの墓遠くなる 大塚 弘毅 108 2
 年の瀬や歩く電話の声尖る 水村 魚愁 108 3
 千枚田守る一枚ごとに寒夕焼け 坂本千恵子 108 4
 春野菜しゃべり出したら止まらない 岡田 淑子 110 2
 鬱すべて吐いてしまった濃あじさい 希田沙知子 110 4
 底冷えの鍵を開けると荒野かな 小林 実 111 6
 通り魔を十重二十重せよ春の月 横須賀洋子 111 6

春の夜は、危ない男が弱き女性を狙って各地に出没する。二重三重はよく聞く言葉であるが、十重二十重に防御せねばと作者詠っているから、大変な世の中である。

通り魔は昔は辻斬りや追剥が思い浮かぶ。現代は、それに加えストーカーがいるから怖い。現代の時流、風潮を詠た得た俳句である。

山崎 幸子

歩いてくる首より上は杜若 大畑 等 109 7
 正月のしつぽが残る露地に入る 石井紀美子 109 7
 嘴を揃えてうぐいす餅が並ぶ 加藤 法子 109 8
 忘却の遠いところに鶯からむ 興津 恭子 109 8
 黙祷は何も祈らず沈丁花 越野 雄治 109 11
 追ひかける夢はまだある葱坊主 片山 依子 110 2

紫陽花に藍の深まる午後三時 希田沙知子 110 4
 血の薄き日なり金魚の浮く日なり 塩野谷 仁 111 4
 生きる面倒死ぬる億劫あみだくじ 高桑 弘夫 111 5
 底冷えの鍵を開けると荒野かな 小林 実 111 6
 黙祷は何も祈らず沈丁花 越野 雄治 111 6

黙祷をする時は、大方亡き人へ慰霊の気持からである。何らかの会で例えば、同窓会、総会、慰霊祭などの冒頭に指示されて、一斉に一分間の黙祷をする時、この頃は心を無にして何も考えずに黙祷している自分がある。

掲句の作者は、墓前で或は室内でも黙祷の刻の中に沈丁花の香りを感じたのである。作品の間合と季語の取合せが微妙に引き合っていて納得する作品である。

東 國人

秋深き椅子に孤独が坐っている 山口 夕紀 108 2
 踊り子草踊り疲れて雨になる 石井 和子 108 3
 尺取りのまだ計っている昭和 大川 園子 108 4
 貝が口開かず十二月八日なる 石崎多寿子 109 7
 後期高齢ぼとりと蟬がおちました 小林 雪枝 110 3
 オーバーのポケットにある未解決 近藤 幸子 110 4
 法師蟬ときおり韻を踏み外し 椎名 鳳人 111 4
 アベノミクス無縁の路地裏恋の猫 鈴木加寿子 111 4
 花吹雪ここは最前列である 高桑婦美子 111 5
 いくつもの手が出て菩薩あたたかし 佐藤 映二 111 6
 後期高齢ぼとりと蟬がおちました 小林 雪枝 111 6

蟬はその再期の時に、木から力なくぼとりと落ち力尽きる。作者も自分自身とその蟬をダブらせて、見ているのであろう。ただ、そこには悲壯観は感じられず、淡々と自分の姿を見つめる作者の姿があるような気がする。

香取 哲郎

山粧う一筆箋の忘却に 山崎 政江 108 2
 掌中に雪を降らせるかな晩年 明石春潮子 108 2
 たんぼばにいわれてしまふ物忘れ 石井紀美子 109 7
 春眠の深きへ落す卵かな 小高 桂子 110 3
 稲の花一粒の雨くちびるに 佐藤美紀江 110 3
 引力の薄らぐあたりからす瓜 塩野谷 仁 111 4
 ほろ酔ひの酒に銀河の一雫 谷本 元子 111 4
 案山子立つ渾身四方の田の舞台 清水三千代 111 5
 鶏頭の歩き出しそう村の昼 高橋 宗史 111 5
 蓮根を立たせ侍らせ華燭なり 木之下みゆき 111 6

田口満代子

冬空はフェルメールの青裏が明ける 石崎多寿子 109 7
 万葉集読みあぐ速度春の川 石井紀美子 109 7
 更衣湖一枚をふところに 香取 哲郎 110 2
 初蝶や被災地と云う現住所 岡田 淑子 110 2
 十月のひかりと影のほか置かず 黒澤 雅代 110 3
 春の月頬白鮫と打ち解ける 久野 康子 110 3
 あじさいの咲き継ぐかたち父と母 希田沙知子 110 4
 唇のしずかな水位羊歯ひらく 清水 伶 111 4
 生きる面倒死ぬる億劫あみだくじ 高桑 弘夫 111 5
 子が先に逝きし十年日記買う 重田 忠雄 111 5
 春の月頬白鮫と打ち解ける 久野 康子 111 5

頬白鮫と言えは凶暴で人を襲うという荒くれ者。今宵は胸うちさざ波も漕えて、わが頬白鮫も穏やか。青光りする夜の海。頬白鮫との交情。春の月なればこそその心象風景であろうか。春の月と頬白鮫との出会いが甘美。

西澤 繁子

つくし野のどこ曲がっても童歌 椎名 鳳人 111 4

血の薄き日なり金魚の浮く日なり
唇のしずかな水位羊歯ひらく
帰省子と明日のパンを買いに行く
人体のあまたの出口山笑う
命樽も磯着も滴り海女あがる
遠ければ遠いほど白花こぼし
赤い灯の窓際未婚の雪達磨
落葉掻き人は大地に愛されて
東京の新陳代謝ゆりかもめ
帰省子と明日のパンを買いに行く
田部井知子 III 6
帰省子と買いに行くのは、馴染みの近所のパン屋さんなのだろうか？ ついでに、わが子の成長もそれとなく、見せてみたいという親心があるのかもしれない。あるいは、たんに親子でパンをかうついでにそぞろあるきなのかもしれない。いづれにせよ、どこにでもあるごく平凡な日常の一コマである。ただ帰省子という季語が、作者の心の中のちよつとした昂ぶりと、非日常を伝えている。

近藤 幸子

傷つけぬ言葉さがしにゆく枯野
満月を支へきれない浮葉かな
冬空はフェルメールの青裏が明ける
慣れという心地おぼろの落し穴
息づまるほどなだれる夜の桜
雲雀追い吾も昇天の蹴使う
蝶乱舞少女の脚のもつれなく
六月の扉の奥に扉あり
ちちははの墓がふるさと燕来る
白寿越え目指す師とあり梅の庭
雲雀追い吾も昇天の蹴使う
一心に蹴を振るっている作者の姿が見える。

- | | | |
|-------|-----|---|
| 山中とみ子 | 108 | 2 |
| 岩見ちづる | 108 | 3 |
| 石崎多寿子 | 109 | 7 |
| 石井紀美子 | 109 | 7 |
| 加藤 法子 | 109 | 8 |
| 香取 哲郎 | 110 | 2 |
| 川井 吉二 | 110 | 2 |
| 佐々木幸子 | 110 | 3 |
| 川嶋 悦子 | 110 | 4 |
| 高桑婦美子 | 111 | 5 |
| 香取 哲郎 | 111 | 5 |

一瞬、雲雀の声に蹴を休め空を仰ぐ。雲雀が一直線に空高く昇って行く。その様子は、唯一心に畑を耕している作者の姿に通じる。耕して来た先端が、空と接して見えるのかも知れない。真直ぐに昇って行く雲雀に、澄んだ作者の心が重く、蹴を使うことで昇華されたのです。

富澤さち子

全身が数へ日コーヒーぐいと飲む
朝焼けの未知なるひと日貫ひけり
寒月の銀輪青年の尖り
十月のひかりと影のほか置かず
山桜ふわつと雲に乗りかえる
つくし野のどこ曲がつても童歌
残照の海が鳴るなり石榴裂け
水音やさくら裏にいくさあり
梅を干すいくたび闇を抜けてきた
落葉掻き人は大地に愛されて

小池美佐子

炎昼を来て金管の真正面
振り向かぬ風を色無き風という
神主の速歩ひらりと寒桜
臘梅に触れて光となる畏れ
忘却の遠いところに葛からむろくがつの腕どこに置いても老花よ
長い休日八月の土性骨
夕顔を数えておれば夜汽車くる
人も石も無辺に積まる暮早し
星冴ゆる生命体という揺らぎろくがつの腕どこに置いても老花よ
人生をさっぱりと達観した詠み方に共鳴しました。

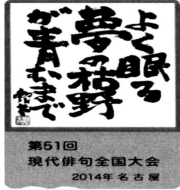
- | | | |
|--------|-----|---|
| 山口 智子 | 108 | 2 |
| 山崎 政江 | 108 | 2 |
| 岩岡 方子 | 108 | 4 |
| 市川 唯子 | 109 | 7 |
| 興津 恭子 | 109 | 8 |
| 菊地 京子 | 110 | 3 |
| 窪田 俊作 | 110 | 4 |
| 塩野谷 仁 | 111 | 4 |
| 木之下みゆき | 111 | 6 |
| 薄井 智介 | 111 | 7 |
| 菊地 京子 | 111 | 7 |

第51回現代俳句全国大会

作品集

投句締切は
7月31日
(必着)

〇応募規定 三句一組・二〇〇〇円
何組でも可。ただし、新作未発表作品に限る。
前書き不可。所定用紙使用。〒住所、姓、電話番号、協会名、会員外の別名明記。投句料は普通為替、定額小為替(無記名)又は現金書留で(必ず作品同封の事)。
〇送付先 〒144 愛知県安城市榎前町西山50 永井江美子方 現代俳句全国大会作品係
〇056619213252
〇締切 7月31日必着
〇顕彰
優秀作品(三賞及び秀逸賞等)を協会の機関誌「現代俳句」に発表するほか、協会刊行物に採録。
〇賞 大会賞、毎日新聞社賞、特別選者賞、秀逸賞、佳作賞。
〇全国大会
平成26年10月25日(土)午後時より、愛知県産業労働センターウイंकあいち8階名古屋市中村区名駅四三四三八
〇05215716131
〇記念講演 大輪瑠彦氏
上智大学客教授、日本伝統俳句協会副会長
演題 和歌の表現技術から見た俳句の特性
〇講評
宮城静生会長はじめ協会幹部
〇懇親会 午後5時より(会費6千円)



第51回 現代俳句全国大会
2014年 名古屋

お一人3組(9句)同時投句者に限り、金子兜入り大賞会長の俳句カードを大会記念図書カードを進呈致します。

主催 現代俳句協会 後援 毎日新聞社

春の吟行会

柏の葉公園（柏市） 若葉の中を

会場 さわやかちば県民プラザ

平成二十六年四月二十九日（昭和の日）



まさに若葉の中の吟行

都市公園として、広大さを誇る柏市の「柏の葉公園」にて春の吟行会が開かれました。天気も雨の予報に反し、薄日の射す気持ちの良い日で、鮮やかな新緑の、正に春そのものの園内をそれぞれ散策。園内には様々なテーマの庭園や水辺があり、珍しい木々が緑を競

っている。娯楽施設や大きなスポーツ施設も充実しており、花水木や藤の花咲くなか、マラソンランナーが走り抜けていく。皆さん楽しみに真剣に句作に取り組んでいました。

会場にて、十二時までに二句投句。用意された昼の弁当をゆつくり頂いた後、高木・高橋両氏の司会により、大畑会長の挨拶で参加者七十五名の句会が始まりました。

選句五句。皆さん真剣其の物です。披講は、渡辺副会長、長浜・野口両氏の三名。選ばれた句が次々と読み上げられる。悲喜こもこもの緊張の後、結果が発表され、成績上位者に会長より賞品が授与されました。みな惜しめない拍手で称え、次の吟行に思いを馳せる。句会は無事盛会に終わり、皆さん精いっぱい頑張った心地良い疲れと、満足の面もちで会場を後にした。そんな春の一日でした。

（下村 洋子記）

〔入賞者作品〕（原則として二句のうち一句）

- ・うららかに子が落ちてくる滑り台 加藤 法子
- ・何処からも樹々は正面昭和の日 加藤 法子
- ・ハンカチの花どの一枚も無伴奏 諸藤留美子
- ・著我明かり辿り着けない今日がある 徳吉洋二郎

昭和の日亀の退屈始まり

なかもと淑子

美しき浪費もありぬ藤の花

伊藤 典子

沼守りの一羽が春愁曳いてゆく

保坂 末子

五メートルで春愁を脱ぐすべり台

長浜 聰子

人類に足りない子供昭和の日

横須賀洋子

近寄れば戻れないかも藤の花

井上けい子

歩くこと考えている五月鯉

渡辺 澄

純粹を呼び戻そうか花水木

高橋 宗史

柏の葉曇りところにより藤垂れる

金子 未完

残る鴨仲間外れと言う仲間

重田 忠雄

樟若葉真水のような匂いして

筧沼 早苗

惜春の水車は固定されてをり

小野 功

さわさわと青き音楽夏隣

寺田美津江

柿若葉バトンタッチの線を引く

三好美穂子

新緑のスワンボートに飛べぬ羽

黒澤 雅代

考へるための木椅子や若葉騒

鈴木 陽子

若葉してああ脳味噌のゆるゆると

大見 充子

〔その他参加者作品〕

- マラソンのパパは手を振り花は葉に
- こともなし椿の上に椿落ち
- ガイガーカウンター越しに昭和の日
- 父ひとり少年ひとり春の土
- ゆりの木の花に隠れてがんセンター
- アイデアを少し下さいさくら草
- 疎に密に晩年の意志昭和の日
- 白が揺らす紅の牡丹カント来る
- 藤棚を潜れば明日あたり会える
- 疼くものあり多羅葉の濃き青葉
- 内田 庵茂
- 高橋 健文
- 矢野 忠男
- イザベル真央
- 大塚 弘毅
- 佐々木幸子
- 高野 礼子
- 大畑 等
- 檜垣 梧樓
- 木之下みゆき

四月はや照明塔が倒れそう
 新緑の五感さえぎる鯉の口
 行く春を抜けるランナーの息荒し
 曇天にハンカチの花はなすがまま
 沼の水半透明に居付き鴨
 待つことを花ハンカチに光さす
 花ハンカチ昭和を香る日のかげり
 色重ね卑弥呼の情躑躅山
 小さき渦小さき竜呼ぶ池薄暑
 廃屋めいてジャスマンたむろせり
 落羽松水辺に芽吹き亀の首
 転びさうでころばぬ走り苜蓿
 ポート漕ぐ明るい孤独の広がりぬ
 柏の葉公園丸ごとみどりの日
 さくらんぼ皆たがいに恋仇
 この星の小暗きところ春の蝶
 朝のランナー若葉太らす水の音
 砦には日の丸の無く昭和の日
 ゼッケンの吾子走りゆくハンカチの木
 青葉若葉森の雫を両の手に
 佇ち話聞かぬふりして花菖蒲
 車椅子押す手緩みし白牡丹
 穴掘りの一人が陥ちる大春野
 痴のはじめ文句があるか夏鶯
 うらみこいえよかあさんしゃがの花
 無防備や若葉青葉の要塞に
 初夏は展覧会の絵のような
 春尽きて仮面の色を塗りかえる

田村 隆雄
 小林 俊子
 岩岡 方子
 森 ふみ子
 伊藤 希眸
 清野 敦史
 西崎 久男
 三上 啓
 高木 一恵
 岡田 淑子
 佐藤 鈴子
 藤井 遥
 立花 洸
 椎名 鳳人
 吉野 精
 松澤 龍一
 野口 京子
 山崎 幸子
 鈴木 瑩子
 久野 康子
 小張 直子
 三浦 侃
 下村 洋子
 吉岡 一三
 細野 一敏
 石井紀美子
 森村 文子
 林 阿愚林



一位の
加藤法子さん



二位の
諸藤留美子さん



三位の
徳吉洋一郎さん

山吹の花は二輪で残りける
 庭園の清し水音風光る
 おもてなし牡丹一株抹茶席
 街じゅうみどり癌センターど真ん中
 柏の葉公園若葉風句会
 研究の成果をあげよ柏の葉
 大王烏賊巡幸万緑をわたくしす
 ダブルスの弧線恋めく昭和の日
 新緑の公園今日は鳩になりたい日
 余白残して新緑の迷い道
 母と子の三角テント春深む
 作り滝とはいえしたたかに水匂う
 仄めけばジャスマンの香気色づけり
 ・晩春駅頭奪衣婆のごとく待つ
 白牡丹危険な香り公に
 花水木淡き思いを誘い出す
 サンガラスがんセンターの手前下車

澤田 寿一
 内田 正成
 高橋 博
 小川トシ子
 増田 豊子
 関根 信三
 長井 寛
 市川 唯子
 渡辺 礼子
 藤田 富江
 富澤さち子
 楠見 恵子
 白木 暢子
 小林 実
 岡田 春人
 松澤 伸佳
 榎伊 棗

(作品の上の・印は正副会長 顧問特選)

■「現代俳句千葉」

合本頒布のお知らせ

創刊号から最新号までの合本(二分冊)を頒布します。

一一〇〇頁を越える貴重な資料であると同時に掲載句から多くのことを学べるものと思います。

頒価…八、五〇〇円(二分冊、送料共)

申し込み…事務局へ(電話、FAXで)

期日…平成二十六年八月末

■「光と影の天平の時空へ」

平成二十六年度夏のミニ吟行会のお知らせ

とき 平成二十六年七月二十日(日)十三時から

吟行地 上総・国分尼寺跡／

国分僧寺跡(市原市)

句会場 市原市民会館 二階第三会議室

交通 JR五井駅下車、東口バスロータリーで

④番で「アリオ市原・市原市役所経由 国分寺行き」に乗車、バス停「市原市役所」で下車。

会費 五〇〇円

申込〆切 六月十三日(会場の都合で四十二名が

定員。受け付けは先着順)

連絡先 並木邑人(TEL:FAK〇四三六一六一〇二八八)

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第二六一回 (平成二十六年二月十一日)

司会 榎垣 梧樓

恋の猫防犯カメラへポーズとる
 ひいらぎも丸くなつて親の家
 冬たんぼぼ空の青きにつまづけり
 年の豆鬼追ひ払ふ老い払ふ
 随ちてゆく二人とも見ゆ妻
 昔よくカモメになつて罪葬と雪
 雪の夜にとうに忘れし詩人の死
 春の雪ころばぬ先の義理いくつ
 あら米寿福寿草やら露の臺
 会見のゴーストライター雪眼して
 辛くても両手をあげるな葱坊主
 雪の夜川の向こうに知事生まる
 春はあけぼのリケジョ等は初期化する
 静脈を探しあぐねて春霞
 全山の魑魅を鎮め雪解川
 お嬢ちゃんりボンすてきね春立つ日
 スープの冷める距離がいよいよ木の芽吹く
 春の雪待機児童が目を回す

岡田 淑子
 なかもと 淑子
 希田紗知子
 佐藤 晏行
 後藤 章
 小林 実
 白木 暢子
 村上 澄子
 大村 錦子
 横見 恵子
 横須賀洋子
 大畑 等
 榎垣 梧樓
 大塚 弘毅
 徳吉洋二郎
 吉野 精
 金子 未完
 林 阿愚林

●第二六二回 (平成二十六年三月十一日)

司会 大畑 等

春鹿の女座りを隙間より
 出来ればお家でぼつくり桃植える
 女房を君と呼びるてあたたかし
 雛工房首制作課係長
 なんとた坂こんな坂さくらはまだか
 近くだめの眉描き足して春障子
 竹林に下草を刈るチャンチャンコ
 裸木や急に色気の出できたり
 春宵一刻膝の別れの近ずきぬ
 北開く空に人体解剖図
 雪の夜の役者化粧を厚くする

楠見 恵子
 金子 未完
 後藤 章
 佐藤 晏行
 村上 澄子
 山中 葛子
 大村 錦子
 大塚 弘毅
 横須賀洋子
 徳吉洋二郎
 吉野 精

笑えない記念日あまたほうれん草
 春ごたつ思いがけない事を聞く
 梅咲いてあつちに飛んだ楽天家
 水温む運動場の蛇口から
 鳥雲にははに似て来る三姉妹
 蜀も独も出づべき穴を探しをり
 数万の落ち着かない白い梅
 公開処刑銃一列の媚薬
 紅梅白梅後ろ姿に覚えあり

岡田 淑子
 中本よしこ
 大畑 等
 股野 久子
 希田紗知子
 榎垣 梧樓
 白木 暢子
 小林 実
 林 阿愚林

●第二六三回 (平成二十六年四月八日)

司会 岡田 淑子

花の雨道路工夫の点呼かな
 春昼のころゆくまでオムライス
 風景に四角いポスト初つばめ
 大金庫室に居座る春の蠅
 桜東風一族郎党団子虫
 ボタン取れそう二月のポセイドン
 椿落つ八パーセントに背をおされ
 廃線のレールを跨ぎ桜狩り
 春満月我が墓穴を掘りて来し
 やぶ椿言つておきたい事たくさん
 春あられ飛びし湯畑化石逝く
 たんぼぼの架飛んで無一文なり
 人の上に桜咲かせて了いけり
 花びらの散り込む仕事靴かな
 いきなりの驚いきなり落第す
 増税の前に食ひだめ花の宴
 はなびらや虫魚鳥獣供養の碑
 花植えよマッカーサー街道竣工す
 手斧打つ人等は絶えて尼寺の春
 病魔なぞ負けてたまるか十返の花

股野 久子
 白木 暢子
 岡田 淑子
 佐藤 晏行
 村上 澄子
 小林 実
 吉野 精
 希田紗知子
 大畑 等
 なかもと 淑子
 林 阿愚林
 徳吉洋二郎
 横須賀洋子
 後藤 章
 山中 葛子
 大塚 弘毅
 楠見 恵子
 大村 錦子
 榎垣 梧樓
 金子 未完

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館・第五会議室)

●第三十二回 (平成二十六年二月二十七日)

司会 小高 稔

春の昼ぼかんとわたしという荷物
 ゆたんぼの時間ラジオを聞く時間
 木の芽田楽とあり傘の零切る
 野に遊び惚けし男から昏れる
 残雪の後戻りできない深み
 密談の形見えたり春の雪
 春雪の力リスマ崩れ村孤立
 うぐいすや僕橋の下の拾いっ子
 風花やひとは胸から瘦せてゆく
 杉戸絵の象のまるまる春の闇
 噛みこたへ如何に臍のシユレッダー
 下心などありません露の臺
 春風や大きな顔して小さくゐる
 雪真白世代交代成りし家
 北端の海が黒くて春まつり
 軒先の獲物を狙う雪の舌

芝崎 梓
 細根 栗
 加藤 法子
 長浜 聰子
 椿 弘毅
 大塚 弘毅
 石井紀美子
 細野 一敏
 徳吉洋二郎
 鈴木 陽子
 長谷川千枝子
 馬淵 津枝
 山崎 幸子
 矢野 忠男
 小林 実
 小高 稔

●第三十三回 (平成二十六年三月二十七日)

司会 山崎 幸子

目借時だんだん怖くなる民話
 叙事詩あり春夕焼の丘があり
 狼と犬の違いが蜃気楼
 慟哭の夜が明け椿まつさかり
 ピリオドのつもりがカンマ蝌蚪生る
 若草野寝押しせしことサボること
 押せば山押し返しくる春の闇
 初恋の原因菌は雪だるま
 春満月阿呆が好きで嫌いなり
 嬉しさを凹ませて食ぶ蓬餅
 裸木の色気広がる大通り
 飯の世を演じきつたり汐まねき
 抽んでて風を読めずや花辛夷
 たらん芽や風にふくらむ葛西橋
 涙目やかふん花粉と望潮
 花開花臍繰りそつと出す余裕
 のどけしや少し寄り目の童子仏
 御神火の島を点せよつらつら椿

椿 良松
 細根 栗
 小林 実
 石井紀美子
 細野 一敏
 馬淵 津枝
 芝崎 梓
 並木 邑人
 大畑 等
 加藤 法子
 大塚 弘毅
 徳吉洋二郎
 山崎 幸子
 矢野 忠男
 小高 稔
 三須 民恵
 鈴木 陽子
 長浜 聰子

●第三十四回 (平成二十六年四月二十四日)

司会 矢野 忠男

スタッフ細胞あるかないのか遠雪崩
魚食べて新樹の森に無数の目
鶯の声を宅配受けてます
人間をぬいでおぼろになりました
たかななや嫁に来ました京都より
ふうこをこいで会いたき人に会う
万骨の覚め始めたる花筏
躑躅満開山彦を喇叭飲み
五大あやふや桜が終りチューリップ
陽炎えりカフカの城も原子炉も
鷹化して鳩に魚板は木魚になる
死者たちの置手紙です桜しべ
抽出しの中の日章旗臙なる
蛤やもの言ふことのしんどいと
花吹雪家の埋れるホームレス
振り出しにもう戻れない花筏
木蓮の散りて寄り合う修験道
花は葉にそのひととき何を仕様

柏研究句会報告

●第二十二回 (平成二十六年三月八日)

司会 小林 俊子

暮れがての帳一枚梅の園
うららかや一直線に手紙書く
露の臺さみどり色は恋の色
啄木が居る一握の春の雪
白梅の臙脂の袴姉は亡く
日向ぼこベンとメモ帳ポケットに
行列の石窯パンや小鳥来る
振り塩のほどよく締り寒明け
溶けてゆく雪敗残の将として
ゆつくりと友達になる苗木札
この泥を愛してしまふ薄氷
伊勢丹の袋が変わる幸彦忌

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|------|----|-------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|------|-------|
| 細野 一敏 | 芝崎 梓 | 良松 | 三須 法子 | 加藤 民恵 | 石井紀美子 | 大畑 等 | 長浜 聰子 | 小林 実 | 徳吉洋二郎 | 細根 葉 | 並木 邑人 | 山崎 幸子 | 鈴木 陽子 | 大塚 弘毅 | 馬淵 津枝 | 小高 稔 | 矢野 忠男 |
| 寛 | きよ | 京子 | 希眸 | 鈴子 | 春人 | 俊子 | 洋子 | 小村 | 下林 | 高橋 宗史 | イザヘル真央 | 大畑 等 | 松澤 龍一 | | | | |

●第二十三回 (平成二十六年四月十二日)

司会 イザヘル真央

母のない春はひたすら靴磨く
春愁や土に埋めれば土になる
その日までナースで居ます沈丁花
背が伸びて漫才学校卒業す
大皿の海髪を引き奇す骨の箸
晩年は花の散り初む明日から
鳳飛びてはひふへほほは比良八荒
さまよえるスタッフ細胞貝の口
池一面散り敷き水の花衣
ひばり野の円の真ん中三重奏
正常に背骨を正す夜の桜
ひと尋の難儀みちなり蛇穴出づ
鶯の初音聞きいるパンの耳
レンドルミン二度寝の夢に祖母がいる

●第二十四回 (平成二十六年五月十日)

司会 下村 洋子

針葉樹広葉樹あり抱卵期
お相手は黒猫のタンゴ青葉闇
闇を射る監視カメラに羽蟻とぶ
薔薇新芽棘あることの重さかな
二夜三夜現の証拠の花咲けり
豊満な牡丹にほつれ薄茶かな
磯巾着岩波書店に居て久し
青葉より青葉にもどる馬の背

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|--------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--|--|--|--|--|--|
| 下村 洋子 | 岡田 春人 | 高橋 宗史 | イザヘル真央 | 大畑 等 | 長井 寛 | 大村 錦子 | 佐藤 鈴子 | 小林 俊子 | 野口 京子 | 伊藤 希眸 | 松澤 龍一 | | | | | | |
| 洋子 | 春人 | 宗史 | 真央 | 等 | 寛 | 錦子 | 鈴子 | 俊子 | 京子 | 希眸 | 龍一 | | | | | | |

図書紹介

『花筏』 相原 一枝

平成二十六年四月二十日 好日俳句会
吹つ飛ばせ皷も猫背も芋嵐
突つ張つてゐる風船の持時間
行くところまで行くつもり花筏

ひろば

■第四百四十回野田俳句連盟春季大会

平成二十六年四月二十七日(日)に野田市
興風会館に於いて第四百四十回野田俳句連盟春
季大会が開かれた。出席者七十名、欠席投句
者三十三名。席題は「惜春」

入賞者 (三句合点) 代表句

市長賞

かざしてはまた研ぐ刃物柿若葉 山中とみ子

議長賞

惜春や橋の向うは蔵の町 山村 自游

教育長賞

春愁を紙飛行機にして放つ 佐々木幸子

連盟賞

春はくせもの家中の釘浮き上がる 岡田 淑子

五位

泣きじやくる仔猫返しにゆく背中 加倉井允子

六位

惜春や囁くものに夜の水 北川 昭久

七位

春の夢右のポケットにひそませる 藤田 富江

八位

ハミングはさくら降る夜の指ぎつね 高野 春子

九位

もう読まぬ絵本いろいろ春惜しむ 佐々木京子

十位

惜春や二軒並びに煎餅屋 保坂 末子

《会員・会友の近況》

- ・月一回の俳句サークル。先輩達の豊かな知識と表現力を、少しでも自分の中へと頑張っています。まだまだ十七文字にまとめるだけで精一杯です。(橋口 久子)
- ・今年から津田沼研究句会、青葉研究句会の二句会で勉強させて頂いています。(徳吉洋二郎)
- ・家人の病も十年目を迎え、なかなか作句の時間も取れずお恥かしい限りでございます。(中村 冬美)
- ・はじめまして。一年ほど前に千葉へ転居してまいりました。(近江喜代子)
- ・足の悪い私は一人では出掛けられないので、土・日、主人とドライブに出掛けております。これからは川へ鮒釣りが楽しみですが、この頃ブルーギルが多くなり、鮒はなかなか釣れません。残念。(三須 民恵)
- ・西東三鬼賞、今回は(も)獲得し損いました。来期もがんばりましょう。(檜垣 梧樓)
- ・四月十七日より、娘の住むハワイへ二週間ほど出かけます。あいだにラスベガスへの旅行も入っており楽しみです。吟行に参加できず残念です。(星野 一恵)
- ・今年の桜は花数も多くとてもみごとです。我家の前の土手も満開です。家の中よりの晩酌たまりませぬねえ！(細野 一敏)
- ・忙しい暮しから少し離れて、土にふれ、花をたのしむ時間が増えました。今年の桜はことのほか、美しく感じられました。(福田 柊子)
- ・最近ちよっと短歌もやっています。万葉

集、古今集、新古今集等々をあさって読んでいます。古典を繙くのはとっても面白いものです。(羽瀨 順子)

・小生、その時季に思いつくまま、メモッておりまして、人様にお見せするような作品はできません。(馬場 馬子)

・「青葉研究句会」に参加させて頂き先輩方のすばらしい句に出合うこと、自分の拙なさ、勉強不足を轟轟と感じているこの頃です。俳句の壁は高すぎます。(鈴木 陽子)

・平寿を過ぎましたが、一人での外出ができる事に感謝して居ります。(日野 葉子)

新会員・会友紹介

近藤 栄治(大畑等)
海光に鷗は昏し卒業歌
つばくらの空に描きゆく風の道
残照を背負ひてゐたる花疲れ

掲示板

《会員・会友異動》

- 逝去 (会員) 北原溪秀、高桑弘夫
- 入会 (会員) 阿部良治、高久清美
- 退会 (会員) 荒木洋子、白井さゆり、大内靖夫、織田孝正、倉岡けい、篠田道子、白田哲三、谷本元子、中川広子、飯田静子、小松幹司、細井しようじ
- 移転 原島典子(船橋市高根台へ)

□ □ 事務局・編集部だより □ □

● 三月十六日の定期総会・俳句大会、四月二十九日の春の吟行会には多数の皆様にご参加頂き、盛況のうちに終えることができました。皆様のご支援、ご協力に感謝致します。

● 青葉研究句会が三年目に、柏研究句会が二年目に入ります。津田沼研究句会は二六三回に至っております。活発な各地の研究句会の状況です。

● 秋の吟行が十月二十六日(日)に開催されます。詳細は次号(八月刊)でお知らせ致します。

● 巻頭エッセイは、定期総会・俳句大会の記事のため、休載となりました。次号に三須民恵さん、次々号に矢野忠男さんのエッセイを掲載予定です。

現代俳句千葉 第一一三号
平成二十六年五月三十一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会
会長 大畑 等

現代俳句千葉編集部
〒278-0037 野田市野田六六五番地
千葉県現代俳句協会事務局
〒270-1471 船橋市小室町二八〇四
高木 一恵
電話〇四七-四五七-二九一二
FAX〇四七-四五七-二九七二